

【発表要旨】



## 館山市大巖院石塔の ハングル書体について

東国大学校 人文科学大学教授 張 栄 吉

日本国館山市の大巖院にあるハングル石塔については、既にいくつかの関心ある方達の自ら研究した論文がある。したがって、本発表ではハングルで書かれた部分の書体について集中的に考察してみようと思う。

この石塔の東面に彫られたハングル表記は「東国正韻」式漢字音表記だ。「東国正韻」式漢字音表記は朝鮮4代王である世宗の言語政策によって作られたものである。世宗はハングルを作って、それで純粋韓国語を正確に表記したのみだけでなく、漢字音も正確に表記しようとした。ところが、この当時既に朝鮮には中国とは別の朝鮮式漢字音（これをしばしば「東音」と言う）が使われていたゆえに、世宗はこの朝鮮式漢字音を中国の原音に近く表記して、この漢字音を一般民衆に教えようとした。このような努力の結果、作られたものが「東国正韻」式漢字音表記法だ。したがって、「東国正韻」式漢字音表記は当時の朝鮮の現実漢字音でなく、中国原音に近く再構築された再構音であり、理想音だ。

ところが、この「東国正韻」式漢字音表記は、『訓蒙字会』（1527年）になると、現実漢字音（「東音」）に変わり使われなくなる。一般的に、壬辰倭乱（1592年）以後に初版が刊行になったあらゆる文献では現実漢字音が現れる。それにもかかわらず、1624年に作られたこの石塔に、朝鮮でも既に現実に使われない「東国正韻」式漢字音表記が現れたことは、非常に興味あることだ。

この石塔東面に彫られたハングルが、朝鮮時代韓半島で出版されたどのハングル本の書体をモデルにしたものであるか、果してどんな本であったか？この問いに対する答えを、いくつかの側面で探ってみよう。

最初は、『東国正韻』（1447年）より集めた字体である可能性だ。しかし、『東国正韻』のハングル書体をよく見回してみれば、[ㅏ, ㅑ, ㅓ, ㅕ] や [ㅗ, ㅛ, ㅜ, ㅠ] 等の母音字の書体がこの石塔の書体とは違う。この石塔の母音字書体は、すべて線で構成されているけれど、『東国正韻』には [ㅡ, ㅣ] の上や下あるいは内側や外にもっと足した線全てが円点で表現されている。例を上げれば [ㅑ] が [ㅑ] の形態を帯びている。したがって、この石塔のハングルを使った人が『東国正韻』の書体をモデルにした可能性は非常に希薄だ。

二つ目には世宗当代に刊行された初期ハングル本などの書体をモデルにした可能性だ。特にこの時期の仏教文献で取り上げることのできる本には、『釈譜詳節』（1447年）、『月印千江之曲』（1447年）等を上げることができるが、この中の『釈譜詳節』の書体と表記法はこの石塔のハングル書体及び表記法と多少似ている。しかし『月印千江之曲』の書体は似ているけれど表記法がだいぶ違っている。『月印千江之曲』の漢字音表記の特徴は、終声子音がない漢字音には、終声子音のある場所に何らの表記もしなかったという点だ。終声がないところに、東国正韻式表記では [ㅇ] や [ㅁ] などを付けなければならない。一

方朝鮮7代王である世祖時に刊行の『月印釈譜』(1459年)の書体を見れば、この石塔の書体とは比較もできない程違う。この石塔の書体は隅の部分非常に鋭いのに比べて、『月印釈譜』の書体は隅が非常に丸く軟らかい。

三つ目に、最も有力な本は仏経諺解書で『楞嚴経諺解』(1462年)、『円覚経諺解』(1464年)、『金剛経諺解』(1464年)、『法華経諺解』(1463年)、『般若心経諺解』(1464年)、『阿弥陀経諺解』(1461年)等を上げることができるが、筆者が見る中でも最も有力な本は『阿弥陀経諺解』だ。この『阿弥陀経諺解』という仏経諺解書は15世紀後半刊行の本だが、この本が浄土宗の重要な所依經典という点で、特に私たちの関心を引く。『諺解』には、まず<活字本>(1461年)があって、次に復刻本である<双溪寺本>(1558年)と重刊本である<桐華寺本>(1753年)、<水巖寺版本>(1636年)、またその復刻本の<雲興寺版本>(1702年)等が伝えられているが、この中でこのハンゲル石塔が作られた1624年以前に刊行された本は<活字本>と<双溪寺本>だ。この二つの本の中で、<双溪寺本>の書体がこの石塔の書体と非常に似ている。<活字本>の書体は字画の隅が軟らかい反面、<双溪寺本>は木版本のゆえ、字画の隅が比較的鋭くて、子音と母音の調和がこの石塔のハンゲル書体と非常に似ている。

以上の考察を通して見る時、<双溪寺本>は出版年代が1558年であるから、『釈譜詳節』や『月印千江之曲』、そして初刊本仏経諺解書が出版されて、ほとんど100年が過ぎた時点という点がまた説得力がある。他の初期の諺解書らが失われて、この双溪寺本『阿弥陀経諺解』が壬辰倭乱前まで朝鮮に伝えられ、その一本が日本へ流伝したと考えれば、この双溪寺本『阿弥陀経諺解』がまさに、この石塔ハンゲル書体のモデルになった可能性が非常に高いと思う。